

書評

綿貫健治著『世界大学ランキングと日本の大学』（学文社）

Book Review

K. Watanuki “World University Rankings & Universities
in Japan”

東京工業大学留学生センター／総合理工学研究科環境理工学創造専攻・准教授

佐藤 由利子

SATO Yuriko

(Associate Professor, Tokyo Institute of Technology)

キーワード：大学ランキング、ワールドクラス・ユニバーシティ（WCU）

2015年の世界大学ランキングにおける中国など他のアジア圏の大学の台頭と日本の大学の順位降下は、大きな危機感をもって報道された。安倍政権による「日本再興戦略」に「今後10年間で世界大学トップ100に10校ランクイン」といった具体的目標が掲げられた中でのこの結果に、「日本の大学はいったい何をしているのか」という批判的論調が、経済界や政府関係者から相次いだ。2004年に世界総合大学ランキングが始まった頃には「ランキングで大学の実力が評価できようか」という超然とした態度を示していた大学関係者も、今やその社会的影響力の大きさに、ランキングに対して無関心ではいられなくなっている。

本書は、米国等における企業勤務を経て国立大学教員となり、国際教育事業会社クアックアレリ・シモンズ（QS）の国際教育者会議で日本代表としてアカデミック運営委員を6年間務めていた著者が、大学ランキングの効用を前向きに捉え、日本の大学がランキングを上げ、世界的に通用するワールドクラス・ユニバーシティ（WCU）（筆者の定義では世界大学ランキング100位以内）になるために取るべき措置を具体的に述べた本である。

第1部「日本の大学の現状と危機」、第2部「世界大学ランキング評価機関とその活動」、第3部「世界大学ランキングにおける日本」の3部から構成されている。第1部では、少子化が進行し、日本に来る留学生、日本から海外に行く留学生の数が共に停滞し、教育財政が逼迫するといった日本の大学

を巡る急速な環境の変化に警鐘を鳴らし、効率化、グローバル化、教育の質の向上及び世界通用化を断行し、ランキングを上げ、世界の高等教育競争に勝ち抜くべきであると述べている。また、ランキング上昇の効用として、留学生を増やし、学生交流の相手先大学を見つけるのが容易になり、コストをかけずに大学の知名度を上げ、(地方の国際大学に留学生が集まることによる)地域活性化、(競争への緊張感保持による)大学の質の向上、(QSの国際交流会議などでの情報交換や優秀人材のリクルート活動を通じた)グローバル人材の育成にもつながると説いている。

第2部「世界大学ランキング評価機関とその活動」では、タイムズ・ハイヤー・エデュケーション (THE)、クアクアレリ・シモンズ (QS)、上海交通大学、USニュース、EU等による世界の主要な大学ランキングの歴史と特徴、関連活動を紹介している。

第3部「世界大学ランキングにおける日本」においては、まず、主要なランキングにおける上位校の地理的分布を分析し、THEの上位800校の3分の2を欧米の大学が占めること、THEでもQSでも、上位10校はアングロサクソン(英国・米国)系の大学による固定化傾向が見られること、100位以内におけるアジアの大学の割合は、THEで11校、QSで17校とまだ少ないが、香港、シンガポール、中国、韓国などの他のアジア諸国が日本の大学を激しく追い上げ、追い越しつつあることを指摘する。そして、このような現状を踏まえた上で、日本の大学が、世界大学ランキング100位以内のWCUになるための提言を行っている。具体的には、①ランキングに入る覚悟を決めよ、②世界標準のグローバル化をねらえ、③明確な数値目標と学長の強いリーダーシップを持て、④エキスパートの登用と専属部隊を置き、⑤大学のブランドを強化せよ、⑥ステークホルダーとの協力関係を強化せよ、⑦戦略的な指標分析を行うべし、の7つである。

この内、①では、大学ランキングは「日本再興戦略」の目標に組み入れられ、競争力強化の有効な手段と認められたので、大学はその向上に向け、「ルビコン河」を渡る覚悟を決めて取り組むべき、と述べ、②では、ランキングなどの世界標準に合わせたグローバル化を勧めている。続く③～⑦は、その具体的手段と位置づけることができるだろう。

本書は、世界大学ランキングにおいて日本の大学の多くが他のアジア諸国の大学に押されて順位を下げるという状況の中でタイムリーに出版され、ランキングの効用を前向きに捉え、ランキング上昇のための具体的方策を示している。しかし、ランキングが、英語圏諸国の大学(英語が世界言語であるため、留学生や外国人材獲得に優位性を持ち、留学生比率や外国教員比率が高い)に有利に働き、高いランキングがさらに留学生や外国人材を惹きつけるといった、ランキング自体が持つ構造的問題には十分に触れられていない。大学ランキングにより、英米のトップ大学を頂点とする一元的な序列が成立する中、日本の大学の価値と競争力が、現在のランキングの指標によって十分に表されているのかどうか、多元的視点によって振り返り、現状の大学ランキングに反映されていない点については、積極的に発信していくことも必要ではないか、という感想をもった。